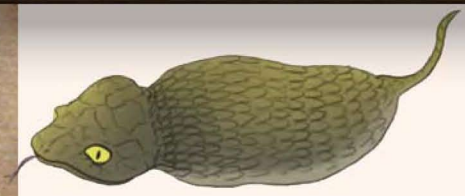
怪しの熊野

其の十五 「ツチノコ」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



紀伊半島での目撃情報が非常に多い「ツチノコ」は、胴の中央部が太いことが最大の特徴だ（イラストはBoBo）

南方熊楠は、折に触れ「野槌（のづち）」について言及している。未確認生物として有名なツチノコのことだ。『異様なる蛇ども』の中で「あるいは上の世代、水辺の蛇をミズチ、すなわち水の主、野山の蝮をノヅチ、野の主と見立てたのだとも思う」と記載し、ツチノコはマムシであるとの考えを示している。

ツチノコは古くから目撃されていたようで、縄文時代の土器にはツチノコらしき模様が描かれ、『古事記』や『日本書紀』にも野槌に関連する記述がある。江戸中期の日本初の図説百科事典『和漢三才圖會』、江戸後期には紀州藩医師で本草学（中国で発達した医薬に関する学問）者の小原桃洞による『桃洞遺筆』、同じく紀州藩医師で本草学者、博物学者の源伴存（ともあり）、別名畔田翠山（すいざん）による『野山草木通志』などにも野槌のことが書かれている。

江戸中期の日本初の図説百科事典『和漢三才圖會』に記載された野槌（ツチノコ、左）と千歳蝮（センザイヘビ、右）。野槌は有名だが、千歳蝮は足があり、よく飛ぶ毒蛇だという。（国会図書館近代デジタルライブラリーより転載）

昭和47年に作家の田辺聖子が小説『すべってころんで』を発表すると、ツチノコは広く知られるようになる。昭和48年に漫画家の矢口高雄が『幻の怪蛇バチヘビ』を発表するとツチノコブームに火が付く。ツチノコ探索のテレビ番組がたくさん作られた。ブームが去った後でも、ツチノコ探しのイベントは各地で続けられ、捕獲賞金までかけられたりした。本や目撃談をまとめると、胴の中央部が太い、ジャンプする、丸太のように転がる、木にぶら下がる、日本酒が好き、「チー」と鳴く、いびきをかく、毒蛇などである。ネズミや蛙を飲み込んだ蛇だ、いや、外国の蛇やトカゲの誤認だ、いろいろ言われるものの、未だ正体は不明のままだ。

紀伊半島での目撃情報が非常に多い。下北山村の有志は、昭和末期にツチノコの目撃が頻発したことを受け、昭和63年に「ツチノコ共和国」として独立宣言した。ツチノコを通じて自然の素晴らしさを守り、伝える地域興しの活動だ、としながらも、ツチノコの捕獲に賞金をかけるなどしている。平成13年には岡山県吉井町を合併するなど領土を拡大している。なんとも楽しい妖怪との付き合い方である。共和国では「亡命者」を募集しているので、納税して国民になるのも良いのではなかろうか。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。